

[研究ノート]

デジタル化資料を用いた戦後期名古屋地域史研究の試み

—国立国会図書館所蔵モージャー氏撮影写真資料による—

A Study on the Local History of Postwar Nagoya Using Digital Materials: The Photographic Records of Robert V. Mosier from the Collection of the National Diet Library

佐藤 美弥・須山 瑞月・森村 水咲
Yoshihiro Sato, Mizuki Suyama, Misaki Morimura

はじめに

1. デジタル化された写真資料を用いた地域史研究
 - 1.1 モージャー氏撮影写真資料と被写体としての戦後期の名古屋
 - 1.2 戦後期カラー写真に関する研究動向
 - 1.3 戦後期名古屋を撮影した写真資料とその研究
 - 1.4 調査・研究の手法
 2. 写真資料の分析（1）柳橋交差点・名古屋駅周辺
 - 2.1 撮影地点と被写体
 - 2.2 資料撮影当時の名古屋駅周辺や堀川周辺の様子
 - 2.3 まとめ
 3. 写真資料の分析（2）栄交差点・南大津通周辺
 - 3.1 撮影地点と被写体
 - 3.2 まとめ
- むすびにかえて

要旨 本稿は、戦後期に名古屋を含む国内各地で撮影されたカラー写真資料である国立国会図書館所蔵モージャー氏撮影写真資料を対象として、メタデータの豊富化を念頭に置いた調査・研究のためにいかなる方法をとることが可能か、実践をとおして検討したものである。インターネットの普及により戦後期写真資料へのアクセスが容易になったことを背景に、撮影地点の同定の方法論等の研究が進展している。本稿では、そうした研究動向を参照しつつ、住宅地図をはじめとした文献調査、街歩き、オーラルヒストリーなどの複合的なアプローチによって写真資料の内容理解を深められることを示した。他方、空間の更新が激しい都市においては、文献調査により被写体を確認することの限界も明らかになった。また、以上のような調査・研究をとおして得られるメタデータを公開する手法の検討など、今後の課題も残されている。

キーワード：人文情報学、戦後史、都市景観、カラー写真、街歩き

はじめに

本稿はデジタル化資料の活用可能性を高めるために、文献調査、街歩き、オーラルヒストリーなどの方法を用いて、いかにメタデータを豊富化することができるか、実践をとおして検討した試みの記録である。

人文学にデジタル技術を応用しようとする人文情報学 (Digital Humanities) の構成要素は、Materials (資料)、Processing (分析)、Presentation (発表) というように表現できる¹。これらの構成要素にデジタル技術をいかに応用するかが検討課題となる。歴史研究において人文情報学と協業しようとする歴史情報学による整理でも、人文情報学の研究傾向にはおおむね上の諸構成要素に対応する発見系、解析系、可視化系の諸系列があるとされている。そこでは、歴史研究の資料が多様かつ、デジタル化が進行途上であるために、発見系の研究が多い現状があるという²。

歴史研究にデジタル技術を応用しようとするとき、デジタル技術を用いた分析あるいは、研究成果の発表の前提となるデジタル化資料を作成すること、すなわち Materials の構成要素に関する研究が不可欠である。それらは公的機関や学術機関が担う大規模プロジェクトによって機関が所蔵する資料を主たる対象として進められている。その一方で身近な地域の資料のデジタル化を進めるためには、それぞれの地域をよく知る主体が小規模に研究を進めていくこともまた期待されていよう。本稿は、そのような考え方にもとづき、公開されているデジタル化資料のメタデータを豊富化し、資料の活用可能性を拡大し、戦後地域史研究の進展に寄与しようという試みである。

具体的には、国会図書館憲政資料室所蔵モージャー氏撮影写真資料を対象とし、撮影地点、被写体や写真の背景に存する社会状況等を明らかにしようとした。これらの調査・研究は人文社会学部国際文化学科佐藤ゼミのゼミプロジェクトとして、ゼミに所属する学生と共同で行った。

以下ではまず、モージャー氏撮影写真資料を含む、戦後期の主にカラー写真を対象とした研究動向を整理し、調査・研究の手法について述べる。つぎに、モージャー氏撮影写真資料に含まれる資料から、名古屋市内のふたつの地域で撮影された写真に着目し、分析を行う。

なお、本稿は「はじめに」「1」「むすびにかえて」を佐藤、「2」を森村、「3」を須山が執筆した。佐藤が全体を監修し、加筆・修正を加えた。本稿全体の文責は佐藤にある。

1. デジタル化された写真資料を用いた地域史研究

1.1 モージャー氏撮影写真資料と被写体としての戦後期の名古屋

モージャー氏撮影写真資料は、連合国軍司令官総司令部 (GHQ) の文民スタッフ (civilian secretarial staff) であったモージャー (Robert V. Mosier) がアジア・太平洋戦争終結後、1946 (昭和 21) 年 4

¹ Drucker, Johanna. 2021 *The Digital Humanities Coursebook*, Routledge, pp.1-3.

² 後藤真・橋本雄太編『歴史情報学の教科書』(文学通信、2019年)、pp.12-15.

月から翌年1月まで滞日し各地で撮影したカラー写真の資料群である。

2008（平成20）年にモージャーの親族から国立国会図書館に304枚のカラースライドが寄贈され、2012年7月3日に紙の複製資料が公開された（憲政資料室収集文書1416）。その後、2017年にデジタル化資料が国立国会図書館デジタルコレクションで公開された。すでに著作権保護期間が満了した資料（パブリックドメイン）となっている³。

国立国会図書館憲政資料室が作成した目録⁴ではメタデータとして資料名称と撮影地が採られている。資料名称は被写体を端的に示すもので、撮影地は推定されたものを含め、都道府県名、市区町村名まで採られている。撮影地がわからない場合には、「場所不詳」となっている。撮影地等については昭和館から情報提供を受けたものを含むとされている。

304点の写真のうち場所不詳が126点と約4割を占める。推定されたものも含めて場所が特定できるものは、愛知県68点（うち名古屋市59点）、東京都40点、京都府19点、広島県17点、山梨県13点、岐阜県12点、神奈川県6点、大阪府3点である。このようにモージャー氏撮影写真資料のうち撮影地が特定できるものでは愛知県、とりわけ名古屋市で撮影された写真が最も多い。さらに目録上撮影地が特定されていない「場所不詳」のものであっても、写真相互の照合から名古屋市で撮影されたものであることがわかるものもある（たとえば写真30「着物姿の3人の少女」⁵は「場所不詳」となっているが、共通する背景によって、名古屋市で撮影されたと推定されている写真90「建物」と同一の場所であることがわかる）。

このように、名古屋市内で撮影された写真を多数含むモージャー氏撮影写真資料は戦後期名古屋の地域史研究の資料としての豊かな可能性を有しているのである。

一方、現状では写真資料のメタデータは前述のとおり、資料名称とおおまかな撮影地のみである。つまり、国立国会図書館デジタルコレクションで検索機能を使用するうえでも限界があり、また閲覧してもなにが撮影されているか不分明な状況である。同時に、インターネット上でパブリックドメインとして公開されていることによって、不特定多数の主体が個々の資料を検討し、利用することが可能になっている。そこで佐藤ゼミでは、モージャー氏撮影写真資料に対して多角的なアプローチにより調査を加え、メタデータの豊富化につなげようとしたわけである。

1.2 戦後期カラー写真に関する研究動向

戦後期に撮影された写真資料に関する研究としては佐藤・衣川⁶および植田・衣川・佐藤⁷によるものがある。これらは主に研究者自身がインターネットオークションや米国のアーカイブズ等で

³憲政資料室「モージャー氏撮影写真資料」2022年12月8日（リサーチナビ、<https://mavi.ndl.go.jp/occupation/jp/Mosier.html>、2023年11月20日最終閲覧）。

⁴2018年8月2日に公開されたリサーチナビの「モージャー氏撮影写真資料」のページでは、検索手段として目録が提供され、昭和館からの情報提供について記載されていたが、本稿執筆時点では確認することができない。

⁵写真番号および資料名称は国立国会図書館の目録による。以下同じ。

⁶佐藤洋一・衣川太一『占領期カラー写真を読む——オキュパイドジャパンの色』（岩波書店、2023年）。

⁷植田憲司・衣川太一・佐藤洋一『増補新版 戦後京都の「色」はアメリカにあった！』（小笠子社、2023年）。

収集した資料による研究である。

佐藤・衣川によれば、占領期日本で撮影されたカラー写真の存在は、ジャーナリズムによって1980年代には報道されていたが、広く知られるようになったのは、2000年代後半のことであるという。その背景にはインターネットの普及があり、米国の大学等がデジタル化資料をインターネットで公開し、あるいはインターネットオークションに個人所有の写真資料が出品されるようになった状況がある⁸。白黒写真も含めれば、写真を歴史資料として使用することはより長い歴史があるが、カラー写真を対象とした研究が行われるようになったのは近年のことといえる。

佐藤・衣川は、占領期の写真資料を、公的機関がある一貫した意図をもって撮影、選別、保管したオフィシャル写真、報道機関が撮影したプレス写真、個人が多様な動機により撮影したパーソナル写真に分類している⁹。本稿が対象とするモージャー氏撮影写真資料はGHQ文民スタッフが職務として来日した際に撮影したものではあるが、撮影者個人が所有、保管したもので、資料の内容をみても都市風景を撮影したスナップ写真がほとんどを占めるパーソナル写真としての性格が強いものである。

たとえば、埼玉県立文書館が所蔵する埼玉新聞社撮影戦後報道写真は、1944（昭和19）年に『埼玉新聞』を創刊した埼玉新聞社が、1947年から1984年までに撮影した白黒写真のネガフィルムを寄贈したものである。つまり、プレス写真としての性格をもつものである¹⁰。新聞社が報道に使用する目的で撮影した写真（当然掲載にいたらなかった「ボツ」写真もある）であるから、関連する新聞記事をとおして撮影地点、撮影日時、どのようなできごとに関するものかといった写真の背景を知ることは相対的に容易である。それに対して、モージャー氏撮影写真資料のようなパーソナル写真は撮影者が多様な個人的動機により撮影したものであるから、撮影者・所有者個人や近親者のみはその文脈を認識できればよく、付随する情報が明示的に残されていない場合も多い。そこで写真の同定作業が必要となる。

写真の同定作業は以下のようなプロセスが含まれる。成分分析、文脈への理解、さらにフレーミングへの理解である。まずその写真が、いかなる時と場所を撮影しているのか、佐藤・衣川の用語でいえば「時空間記録」を分析することが成分分析である。これに対して文脈への理解は、写真を撮影するという行為、撮影されたメディア、撮影されたあとの経緯（資料の来歴）といった撮影の背後にある情報を認識することである。文脈への理解は、さらにその写真が環境をいかに切り取ったか、というフレーミングの理解を促すという¹¹。

⁸ 前掲・佐藤・衣川『占領期カラー写真を読む——オキュパイドジャパンの色』p.1。なお、写真資料の把握の方法や後述する撮影地点同定に関する研究に、佐藤洋一「米国における占領期日本の写真資料をどう捉えるのか——現状・全体像・日本への還元における課題」『カレントアウェアネス』347（2021年）、佐藤洋一・衣川太一「占領期写真の複合的活用に関する試み——一九四五年東京・銀座のケーススタディ」『昭和のくらし研究』19（2021年）、佐藤洋一・衣川太一「写真撮影地点同定方法一般化の試み——占領期のパーソナル写真を事例として」『デジタルアーカイブ学会誌』5（S1）、（2021年）がある。

⁹ 前掲・佐藤・衣川『占領期カラー写真を読む——オキュパイドジャパンの色』pp.40-42。

¹⁰ 埼玉新聞社撮影戦後報道写真については、埼玉県教育委員会編『埼玉県史料叢書21 埼玉新聞社撮影戦後報道写真 フィルムのなかの埼玉 1947-1964』（埼玉県、2020年）。

¹¹ 以上写真同定のプロセスについては、前掲・佐藤・衣川「写真撮影地点同定方法一般化の試み——占領期のパーソナル写真を事例として」pp.S9-S10。

本稿が対象とするモージャー氏撮影写真資料もまた、1945年から1946年にかけてGHQの文民スタッフが日本各地で撮影した写真、という以上の情報がなく、同定作業が必要となる。そこで、後述するように、先行研究を参照しつつ、歴史研究の方法を応用した同定作業を試みた。

1.3 戦後期名古屋を撮影した写真資料とその研究

戦後期の名古屋を撮影した写真資料に関する文献としては名古屋郷土文化会が編んだ『一米国人の見た戦後の名古屋』¹²、いずれも阿部英樹が編んだ『占領期の名古屋——名古屋復興写真集』¹³および『占領初期の名古屋——「後藤敬一郎関係写真資料」調査報告』¹⁴などがある。

前者は、1949（昭和24）年5月から翌年7月にかけて、米国第5空軍の軍属（無線技術教官）として名古屋に滞在したウィリアム・S・ペリーが撮影した約130点のカラーおよび白黒写真である。2005（平成17）年に名古屋市在住の岡崎茂がアマチュア無線で知り合ったことを契機として譲り受けたもので、中日新聞、名古屋市博物館で紹介され、また名古屋郷土文化会から写真集が刊行された¹⁵。写真集では79点（表紙図版も含む）が掲載され、解説が付された。ただし、目録などは掲載されておらず全体像はわからない。また、写真集には所有権・著作権についての注記があり、利用については名古屋郷土文化会事務局への問合せを要する。

後二者は、菓子製造販売の老舗である株式会社青柳総本家の四代目社長であったと同時に、写真家としての一面ももった後藤敬一郎の活動に関連して同社に所蔵されている写真資料群「後藤敬一郎関係写真資料」の一部を紹介したものである。阿部によれば、「後藤敬一郎関係写真資料」は、「写真店開業以前、趣味的に撮られた写真」「戦時中に報道目的で撮影された報道写真」「占領初期に名古屋市の渉外事務に係わって撮影・収集された写真」「前衛写真家としての創作写真」が含まれているという。『占領期の名古屋——名古屋復興写真集』は、1945年10月から約2年に撮影・収集された3,000点超の写真のうち約528点を紹介したものである¹⁶。『占領初期の名古屋——「後藤敬一郎関係写真資料」調査報告』ではさらなる写真を掲載し、同写真資料の「歴史資料としての特質や概要を明らかにしようする目的」¹⁷で刊行されたものである。「後藤敬一郎関係写真資料」も、以上のようにその一部が公開されているが、全容は明らかとなっておらず、また現状で所有者における資料の公開が行われているわけではない¹⁸。

このように名古屋の戦後期に関する写真資料については、少ないながらもその存在を明らかにする文献が刊行されている。モージャー氏撮影写真資料はそうした状況を進展させる可能性を有し、加えてパブリックドメインであるため研究対象としやすいという特徴をもっているのである。

¹² 名古屋郷土文化会編『一米国人の見た戦後の名古屋』（名古屋郷土文化会、2014年）。

¹³ 阿部英樹編『占領期の名古屋——名古屋復興写真集』（風媒社、2020年）。

¹⁴ 阿部英樹編『占領初期の名古屋——「後藤敬一郎関係写真資料」調査報告』（中京大学経済学部、2023年）。

¹⁵ 来歴については、前掲・名古屋郷土文化会編『一米国人の見た戦後の名古屋』p.2。

¹⁶ 前掲・阿部編『占領期の名古屋——名古屋復興写真集』pp.2-3。

¹⁷ 前掲・阿部編『占領初期の名古屋——「後藤敬一郎関係写真資料」調査報告』p.7。

¹⁸ 前掲・阿部編『占領初期の名古屋——「後藤敬一郎関係写真資料」調査報告』p.8。

1.4 調査・研究の手法

モージャー氏撮影写真資料を分析するため、本稿では歴史研究の方法を応用し、文献調査、街歩き、オーラルヒストリーを組み合わせる手法をとった。

文献調査では、戦後期名古屋を撮影した写真集を参照したほか、主に戦前期、戦後期に作成された住宅地図的な、つまり居住者や営業者を建築の区画ごとに記載した地図資料を参照した。戦前期に関しては、1933（昭和8）年に作成された『名古屋市居住者全図』¹⁹が残る。戦前・戦時期は建築の更新が盛んであった時期でもあるので、1933年時点の地図に記載された建築の名称や居住者・事業者がそのまま戦後期まで継続しているわけではないことに注意が必要である。そのほか戦災復興事業から続く都市改造事業が進行していた1960年時点の住宅地図を復刻した資料²⁰も使用した。さらに愛知県の歴史や文化に関するデジタルアーカイブ²¹等も参照した。

街歩きでは、対象とした写真資料が撮影された場所で、撮影地点の推定、現在の状況の把握を試みた。2022（令和4）年12月26日に、近鉄名古屋駅から、広小路通を東進し、栄交差点までを歩いた。とくに写真87「街並み風景（名古屋駅等鳥瞰）」に関しては、広小路通沿いのビル上階から名古屋駅を含む西方一帯を撮影したものと推定されたので、被写体となっていた柳橋交差点付近を注意して観察したほか、撮影地点と想定された名宝ビルまたは朝日新聞社ビルと、高度は異なるもののほぼ同様の画角で撮影できると想定された、ヒルトン名古屋からの観察を行った。また、栄交差点、南大津通周辺の観察を行った。

オーラルヒストリーは、2023年2月3日に、中区の老舗料亭蔦茂の会長（本稿執筆時点）で地域の歴史についての執筆・出版²²も行っている深田正雄氏にお話をうかがう機会を得た。写真の分析結果を提示し、関連する情報をお話いただいた。インタビュー動画からトランスクリプトを作成し、分析に活用した。

以上のような調査・研究の結果を統合し、写真資料を分析した結果が以下のふたつの節である。

2. 写真資料の分析（1）柳橋交差点・名古屋駅周辺

2.1 撮影地点と被写体

本項では、モージャー氏撮影写真資料のうち、写真87「街並み風景（名古屋駅等鳥瞰）」に着目し、深田正雄氏へのインタビュー調査、文献調査にもとづき、写真には何が写っているのか、また

¹⁹ 『名古屋市居住者全図』は中区周辺を範囲としたもので、1926年、1929年、1933年の複製資料が名古屋市鶴舞中央図書館に所蔵されている。以下、1933年の資料を『居住者全図』と略記する。

²⁰ 「名古屋の旧町名を復活しよう！」上下（北見式賃金研究所、2014年）。名古屋の旧町名の復活を目指す有志の会が作成した住宅地図である。「住宅地図協会が昭和35年に発売したものを加工した」とあるので、『名古屋市全住宅案内図帳 昭和三十五年版 中区』（住宅協会、1960年）が原資料であると推測される。深田正雄氏に提供いただいた。

²¹ Network2010 (<https://network2010.org/>、2023年11月20日最終閲覧)。特定非営利法人ビジュアルコンテンツプロダクトネットワークが運営するデータベースである。

²² 深田正雄『住吉の語り部になりたい——祖父良矩とのダイアログ』（料亭蔦茂、2021年）。

戦後期の名古屋駅周辺のようなすはどのようなものであったのかについて明らかにする。

写真 87 は広小路通南側にある朝日ビルの塔屋から西方、堀川以西名古屋駅周辺を撮影したものと推定できる。朝日ビルの西には高いビルとして名宝ビルもあるが、朝日ビルを単独で撮影した写真（写真 124 「建物」）があり、遠景を撮影しようとするのであれば、より高い朝日ビルからのほうが自然であろうという理由からそのように推定した。当時の朝日ビルのやや東方に位置する現在の名古屋ヒルトン 28 階からは、同様の範囲の写真を撮影することができた（参考写真）。

画面中央の大きな白いビルが名古屋駅 ① であり、左側の幅の広い通りは現在の曲がり具合と一致しているため広小路通であることがわかる。また、広小路通には市電（路面電車）が走っており、新旧の地形図を比較できるウェブサイト「今昔マップ」²³を参照すると、現在の東山公園辺りから笹島までを東西に結ぶ路線であることがわかる。画面左の交差点は柳橋交差点 ② である。広小路通を走る路線とクロスする路線は、名古屋城北西の現在の浄心駅付近から南進し、現在の日比野駅付近を經由し、築地口など名古屋港方面を結ぶ、名古屋駅の東を南北に走る路線である。

画面左側の広小路通南側の街並みについては、『居住者全図』や深田氏へのインタビュー調査から特定できたことが複数あった。柳橋交差点から西に少し進んだ地点にある、周辺より大きく、壁面が黒色に塗装された建築は 1933（昭和 8）年時点では三井物産のビル ③ であることがわかる。モージャーが撮影した時点でもそのまま三井物産であったと考えられる。現在は、この場所には「三井物産名古屋ビル」がある。

画面左手前の多角形の塔を有する建築 ④ の窓の右の 4 文字を見ると、はっきりと判読することができないが、「〇〇銀行」と書かれている。『居住者全図』を参照すると、堀川と柳橋交差点の間に「明治銀行西支店」がある。しかし、明治銀行は 1938 年に廃業している²⁴。改めて壁面の 4 文字をみると「静岡銀行」と書かれているようにも思われる。1966 年には同地点に静岡銀行名古屋支店がある²⁵が、1946 年時点で静岡銀行が営業していたかどうか、今回は明らかにできなかった。また、この建築と柳橋交差点の間に黒色の屋根で間口の広い石原商店 ⑤ がみえる。

画面中央から右側にかけての広小路通北側の地域については、『居住者全図』では個人の住宅や倉庫が多く、堀川沿いには水産市場も存在している。しかし、写真が撮影された 1946 年時点でも同様であったのか、写真からは広小路通以北の具体的な建築を特定することはできなかった。

2.2 資料撮影当時の名古屋駅周辺や堀川周辺の様子

本項では、深田氏へのインタビュー調査にもとづき、写真 87 撮影当時の名古屋駅周辺の様子について述べる。深田氏によると、当時の市電、とくに今池から栄や納屋橋の間は多くの人で賑わっていたが、堀川以西はそこまでのにぎわいはなかったそうである。当時住吉町（現栄三丁目）に

²³ 谷謙二「今昔マップ on the web」(<https://ktgis.net/kjmapw/>、2023 年 11 月 20 日最終閲覧)。

²⁴ 『中央銀行会通信録』425（1938 年）、p.29。

²⁵ 名古屋タイムズアーカイブス委員会編『昭和イラストマップ 名古屋なつかしの商店街』（風媒社、2014 年）、p.68。

住む小学生だった深田氏にとっては、堀川より西はほとんど足を伸ばすことのない怖い場所であったという。具体的には、堀川の納屋橋より南側には夕方になると多くの売春婦が集まっていたというような記憶をうかがった。

写真122「街並み（鳥瞰）」は、写真87と同じ地点から南方を撮影したもので、納屋橋以南の堀川が撮影されている。広小路通と三蔵通（納屋橋の南の通り）の間には、江戸時代には尾張藩の蔵があり、のちに牢獄、倉庫と変遷した。深田氏によれば、その跡地には自動車学校や「名古屋温泉パレス」がつくられたという。名古屋温泉パレスは、夏はプール、冬はスケート場になった。2階は1,000人ほどが集まるダンスホールであり、日本人だけでなくアメリカ人も交じってキャバレーが営業されていたそうである。

2.3 まとめ

現在の名古屋駅は多くの高層ビル、オフィスや店舗が建ち並び、名古屋の中心ともいえる場所である。しかし写真87が撮影された当時の戦後期の名古屋駅周辺は写真資料の分析、住宅地図等の文献やオーラルヒストリーなどから、低層住宅が立ち並ぶ現在とは全く異なる景観を有する地域であったことがわかった。今回の調査では、広小路通以北のようすは明らかにできなかったため、そこが戦後期にはどのような地域であったのか明らかにすることは今後の課題である。

3. 写真資料の分析（2）栄交差点・南大津通周辺

3.1 撮影地点と被写体

本項では写真170「街並み（愛知県庁名古屋市役所遠景鳥瞰）」、写真182「街並み（丸栄名古屋公証人合同役場五金等鳥瞰）」を中心に名古屋市中区栄の広小路通南側の大津通周辺の当時のようすを検討する。また、補足資料として写真125「街頭風景（飲食雑貨店「五金」前）」と写真161「日用品店「オカヤ商店」」も用いる。

写真170は南大津通を南方から撮影したものである。撮影地点は『居住者全図』を参照すると南大津町2丁目4番地に所在する「福寿生命」の屋上であると考えられる。近年の雑誌『中部財界』の記事²⁶によれば、現在の大津通電気ビルは、中部配電（中部電力の前身）が1942（昭和17）年に福寿生命の本社社屋を譲り受けて使用した後に、その土地に新築したものである。つまり、モージャーが写真を撮影した当時はこのビルは中部配電のビルだったと考えられる。

画面奥には愛知県庁舎と名古屋市役所庁舎（①）の特徴的な屋根が写っており、どちらの壁面も黒色の塗装が施されている。これは戦時中に米軍の空襲の被害を少なくすることを意図した防空

²⁶ 「完成した「大津通電気ビル」——3月3日、サカエに新名所が誕生」『中部財界』35（4）、（1992年）、巻頭ページ。

迷彩である。南大津通りには市電が運行しており、人々の足として利用されていたことがわかる。

次に南大津通両側の建築を『居住者全図』により検討する。まず東側を見る。手前の赤レンガの外観の建築から小島電気商会（②）、共済ビル（③）、千代田生命ビル（④）、広小路通を挟んで北側に再び赤レンガの外観の日本銀行名古屋支店（⑤）がある。通りの西側は、画角の問題で東側より見える建築が少ないが、写真中央の巨大な白いビルが東海銀行中支店（旧伊藤銀行）（⑥）である。伊藤銀行は名古屋で初めての私立銀行であり、1941年に愛知・名古屋両銀行と合併し、東海銀行となり、現在は三菱東京UFJ銀行となっている²⁷。東海銀行中支店の南側には建設中の木造建築物があり、そこには「五金」と記された看板（⑦）が設置されている。この「五金」の建築は別の写真にも写っている。以下では、この「五金」について検討する。

写真182は名古屋株式取引所（現在の名古屋証券取引所）（①）を中央に写したものである。現在の名古屋証券取引所の位置と、右下に写る「五金」（②）の位置から考えると、この写真も写真170と同じ地点から撮影したものと考えられる。株式取引所の北側には建設中の丸栄百貨店（③）が見える。丸栄百貨店は2018（平成30）年6月に閉業し、2022（令和4）年3月から商業施設マルエイガレリアが開業している。

1953年当時の地図²⁸によれば「五金」とは「洋装百貨店」であるという。営業内容として「ビューティサロン」「食堂女雅美」「理髪」「パーマ」と羅列されており時代を感じさせる。写真125の写真には五金の開店を知らせる看板が大きく写っている。写真170が撮影された時点では建築中であった五金が完成しているのである。看板には「高級食堂・特撰雑貨の店」と書いてある。つまり、1953年時点でも、1946年の開店時同様に飲食店と服飾関係の営業を継続していたことがわかる。現代の感覚では、百貨店と聞くと松坂屋や三越、同じ写真に写っている丸栄百貨店など、大きなビルを想像してしまうが、戦後期には五金のような小さな店舗も百貨店と呼ばれていた。過去と現在の意識の違いが感じられ非常に興味深い。

ところで、写真170番に小さく「ヨロヅヤ」（⑧）という看板が見える。この店舗を至近距離で撮影したものが写真161である。看板には「家庭日用百貨」「オカヤ商店」という文字が見える。名古屋で「オカヤ」と聞くと岡谷鋼機を想起するが、深田氏は「岡谷はこういう名前使わないで漢字で書くか笹谷っていう」と述べ、岡谷鋼機との関係はないだろうとした。この写真に写る荒物屋は個人商店だったものと考えられる。

3.2 まとめ

ここまで、4点の写真を用いて南大津通周辺の当時のようすを考察した。やはり名古屋の中心地だけあって銀行や保険会社のビルが目立つが、中には五金やヨロヅヤなど小さな店舗も存在して

²⁷ 「昭和初期の名古屋「伊藤銀行」」2012年3月16日（Network2010 総合索引、<https://network2010.org/article/703>、2023年11月20日最終閲覧）。

²⁸ 前掲・名古屋タイムズアーカイブス委員会編『昭和イラストマップ——名古屋なつかしの商店街』p.25。

おり、人々の日常生活も確かに存在していたことがわかった。南大津通の西側を撮影した写真182では空地が多く残っていることに對し、写真170では南大津通に沿って木造建築が新築されていることから、復興は大通り沿いから行われたと推察される。戦災復興の過程で大通り沿いの小さな木造店舗は無くなってしまったが、戦後の人々の暮らしを支えたことは間違いないだろう。

むすびにかえて

本稿では、国立国会図書館憲政資料室所蔵モージャー氏撮影写真資料を対象として、付随する情報が少ないパーソナル写真のメタデータの豊富化、ひいては地域史研究のための資料としての活用可能性を高めることを念頭に置いた調査・研究の実践について述べた。

柳橋交差点・名古屋駅周辺、栄交差点・南大津通周辺のふたつの地域に着目し、文献調査、街歩き、オーラルヒストリーを組み合わせた複合的な調査により写真を分析した成果を記述することをおして、写真資料の内容への理解を深め、情報を付加できることを示した。文献調査では撮影地点や被写体を確定し、街歩きでは被写体に関連する情報が現地に残っているか、また撮影時点と現在の景観の変化はあるかといったことを認識できる。そして、オーラルヒストリーは、写真資料や文献からは得ることが難しい、地域を生きた人々の意識などを知ることができる。

そのような可能性の他方で、課題も挙げるができる。被写体の同定の過程では、文献調査の限界も認識された。すでに刊行されている歴史的な写真を掲載した写真集は、多様な所蔵先から収集した写真に簡単な説明文を付しているが、そうした説明文はしばしば典拠が示されず、同定の典拠とすることが難しい場合もあった。その点、住宅地図は建築の位置を確定できれば、同定の重要な根拠となる。しかし、一方では住宅地図は必ずしも定期的に刊行されているわけではない。撮影時点と住宅地図刊行時点のタイムラグをいかに埋めるかが課題となる。そのためにさらなる文献調査を行う必要も生まれるが、どこまで調査を行うかの見極めも必要となろう。写真の同定作業の過程では以上のような困難も認識された。

さて、本稿においてはモージャー氏撮影写真資料のなかの名古屋市内で撮影された写真約60点のうち数点を検討したのみである。さらに、写真の分析を進めることができれば、その成果をいかにプレゼンテーションするかが次なる課題となる。デジタルアーカイブ等の方法で成果を広く公開することで、地域資料の活用可能性はさらに大きくなる。その方法を検討することは今後の課題として残されている。

謝辞

本稿の執筆にあたっては深田正雄氏、ヒルトン名古屋のみなさまに多大なご協力を賜りました。記して謝意を表します。

本研究は、名古屋市立大学特別研究奨励費 2214009 および名古屋市立大学特別研究奨励費 2313038 の助成を受けたものです。

写真 87 「街並み風景（名古屋駅等鳥瞰）」 国立国会図書館所蔵

①名古屋駅 ②柳橋交差点 ③三井物産 ④多角形の塔を有する建築 ⑤石原商店



参考写真 ヒルトン名古屋 28 階から名古屋駅方面（2022 年 12 月 26 日）佐藤美弥撮影



写真122「街並み（鳥瞰）」国立国会図書館所蔵 ※納屋橋南方を撮影したもの



写真121「街並み（鳥瞰）」国立国会図書館所蔵 ※納屋橋北方を撮影したもの



写真 170 「街並み（愛知県庁名古屋役所遠景鳥瞰）」 国立国会図書館所蔵（右）

- ①愛知県庁舎・名古屋役所庁舎 ②小島電気商会 ③共済ビル ④千代田生命ビル
⑤日本銀行名古屋支店 ⑥東海銀行中支店 ⑦「五金」の看板 ⑧ヨロツヤ

写真 182 「街並み（丸栄名古屋公証人合同役場五金等鳥瞰）」 国立国会図書館所蔵（左）

- ①名古屋株式取引所 ②丸栄百貨店 ③五金



写真 125 「街頭風景（飲食雑貨店「五金」前）」 国立国会図書館所蔵（右）

写真 161 「日用品店「オカヤ商店」」 国立国会図書館所蔵（左）

